

Cognitions Associated With Attempts to Empathize: How Do We Imagine the Perspective of Another?

共感しようとする試みと関係する認知: どうやって他人の視点を想像しているのか?

Davis, M, Soderlund, T., Cole, J., Gadol, E., Kute, M. Myers, and M. Weihing, J. (2004). Cognitions associated with attempts to empathize: How do we imagine the perspective of another? *PSPB*, 30(12), pp.625-1635.

Rep. 小森めぐみ¹.

ABSTRACT

視点取得の理論的な重要性は昔から認識はされていたものの、他者の視点を想像する試みと関連する認知の研究は驚くほど少しか行われてこなかった。本研究ではこの問題をとりあげ、視点取得が自己関連の思考を増やすかを検討するために、二つの実験を行った。一つ目の実験では、観察者の認知を評価するために、思考リストテクニックが用いられた。二つ目の実験では reactive ではない測度が用いられた。ターゲットの立場にいる自己を想像する教示と単にターゲットの立場を想像する教示は伝統的な統制条件と比較して自己関連の認知のレベルを増加させた。自己想像条件はターゲット想像条件よりも自己関連の思考を増やし、ターゲット関連の思考を減らしていた。統制条件であげられた思考は、観察者が自分自身とターゲットの間に距離を置いていることを示唆した。何の教示も受けない条件の観察者は、ターゲット想像条件の観察者と似たような認知を報告した。

- ・ 本研究では、視点取得をするときに、一体何が起きているのかを実証的に検討する

Possible accounts of perspective taking

視点取得について、3つの仮説が考えられる

仮説① 視点取得は原始的で非意識的なプロセスを経ている

- ・ 表情模倣研究、脳神経研究からの裏付け (e. g., Adelman & Zajonc, 1989; Decety & Grezes, 1999)
- ・ 視点取得をすることによって模倣が増えるという逆の知見もあり (Bargh & Chartrand, 1999)

仮説② 視点取得は観察者のもつ既存の知識構造を使いやすくする

- ・ Karniol (1986, 1995) によると、人は転換法則 (transformation rule) を使用してターゲットの内的状態を推測する。その際には、ターゲットが属するカテゴリーについての知識を用いて、刺激と刺激への反応を結びつけることをしている

仮説③ 視点取得は自己スキーマを活性化させる

- ・ Davis et al (1996) は、視点取得がターゲットへの 自己の特性 のあてはめを高めることを示した。
- ・ 多くの研究がこの仮説を支持する結果を残しているものの、プロセスは直接検討されていない。

The current research

本研究の目標は2つ

- ① 視点取得をしようと努力しているときには、どんな思考が生じるかを探索的に検討する
 - ② 視点取得が自己関連の思考を増加させるという仮説を検討する
- ※自動的なプロセスなどの過去の知見を否定するものではなく、一部を検討したもの

¹ 一橋大学大学院博士課程.

実験概要

- 2つの実験を実施。一つはビデオを見たあとに、そのときの思考を思い出してリストアップし、それをコーディングした。もう一つは、一人称代名詞の使用をカウントした。
- 思考リストの使用にはリスクもあるがベネフィットもある
 - リスク：記憶のゆがみや動機・配慮の影響を否定できないし、直接プロセスを検討したものとは言い切れない。実験2を実施することでそれを補う。
 - ベネフィット：30年以上使用されている由緒正しい方法で、認知次元で何が起きているかを探索的に検討するためには有用(Cacioppo, von Hippel, & Ernst, 1997)。

Manipulating perspective taking

本研究では4つの教示を使って視点取得を操作する

- 本研究では視点取得条件の教示として imagine-target, imagine-self を、視点取得をしない条件の教示として抑制、natural を設定
 - imagine-target：ターゲットの思考、感情を想像する
 - imagine-self：ターゲットの立場にいた場合の自分の思考、感情を想像する
 - ◇ imagine-self, imagine-target 条件は非常に似ているが、そこで起きている認知活動は異なっている可能性を示唆する研究もある (Batson, et al., 1997)
 - 抑制：ターゲットの overt action に集中させる (視点取得を抑制させる教示)
 - natural：教示を何も与えない (より自然な状態で生じる思考を検討するため)
- 実験では抑制条件 vs. 視点取得条件、imagine-self 条件 vs. imagine-target 条件の計画比較を実施し、探索的に natural 条件の結果を分析する。

Experiment 1

方法

Participants

- 大学生 62 名 (男 26 女 36) が授業の追加点と引き換えに実験に参加した。条件間の男女比は均一。

Procedure and Material

- 実験者は女性で、参加者はスクリーンの前に案内された。刺激は腎臓に問題を抱える Jackie のインタビュー番組で、参加者は見る前に上記4種類の教示のうち一つを受け取った。映像は約150秒で、Jackie は腎臓に問題を抱えて暮らす大変さを説明し、時には感情的になって涙した。

Dependent measures

- 映像終了後、参加者は見ている間に考えたことを思い出して書くよう求められた。

Coding system

- 条件配置を知らない2名のコーダーが、事前に設定された13の指標に自由記述をふりわけた。コーダー間の各カテゴリーへのわりあての信頼性は.55~.92で、平均は.92だった。
- カテゴリーの振り分けが終わった後、13の指標をさらに3つのカテゴリー (自己思考、ターゲット

ット思考、別思考)にまとめ²、各参加者の(?)全思考量を分母とした場合の各カテゴリーへの分布を従属測度の得点とした。

結果(Table3 参照)と考察

- 性別×条件のMANOVAを実施したが、性別の主効果や交互作用は有意ではなかった。条件の主効果のみが有意だったので($F(9, 159)=3.08, p<.01$)、方法部分で述べた下位検定を行った。

TABLE 3: Mean Percentage of Thoughts Falling Into Each Coding Category: Experiment 1

Variable	Imagine Self	Imagine Target	Watch Target	Natural
Imagine self	.34	.09	.04	.07
Identification of self with other	.05	.04	.02	.03
Recall of self-information	.05	.07	.05	.06
Self-related thoughts	.44	.20	.13	.18 _{a,b}
Imagine target	.08	.23	.15	.21
Target-centered affective response	.08	.14	.18	.18
Positive assessment of target	.02	.01	.02	.04
Target-related thoughts	.18	.38	.35	.44 _b
Differentiation of self from target	.08	.07	.05	.04
Negative assessment of target	.08	.08	.11	.10
Focus on target's appearance	.02	.06	.02	.04
Distancing thoughts	.19	.21	.39	.18 _a

NOTE: The subscript a indicates that the comparison of the watch-target versus perspective-taking cells was significant ($p<.05$) for this variable. The subscript b indicates that the comparison between the imagine-self and imagine-target cells was significant ($p<.05$) for this variable.

計画比較の結果

自己関連思考

- 視点取得条件のほうが抑制条件よりも得点が高かった。 $(t(57)=2.76, p<.01)$
- Imagine-self 条件のほうが imagine-target 条件よりも得点が高かった $(t(57)=3.06, p<.01)$ 。

ターゲット関連思考

- 視点取得条件と抑制条件のあいだに有意差は見られなかった。 $(t<1.08)$
- Imagine-target 条件のほうが imagine-self 条件よりも得点が高かった $(t(57)=2.73, p<.01)$ 。

別思考

- 抑制条件のほうが視点取得条件よりも得点が高かった。 $(t(57)=2.78, p<.01)$
- Imagine-target 条件と imagine-self 条件の間に有意差は見られなかった。

Natural 条件の結果

自己関連思考

- Imagine-self 条件のほうが natural 条件よりも得点が高かった。 $(t(27)=2.92, p<.01)$
- 抑制条件、Imagine-target 条件と natural 条件のあいだに有意差は見られなかった。 $(ts<1)$

ターゲット関連思考

- natural 条件のほうが imagine-self 条件よりも得点が高かった $(t(27)=<3.86, p<.001)$ 。
- 抑制条件、Imagine-target 条件と natural 条件のあいだに有意差は見られなかった。 $(ts<1.3)$

²各指標をカテゴリーにまとめることの妥当性を検討するために、自然条件を入れなかった事前調査のコーディングデータと今回のコーディングデータをあわせて平均点を算出し、指標同士の相関を検討した。その結果、カテゴリー内の指標の相関は高く、別カテゴリー内の指標の相関は低かったため、カテゴリーにまとめることは妥当性が高いと判断した。

別思考

- ・ 抑制条件のほうが natural 条件よりも得点が高かった ($t(29)=2.39, p<.05$)。
- ・ 抑制条件、Imagine-target 条件と imagine-self 条件のあいだに有意差は見られなかった。 ($ts<1$)

☆これらの結果を総合的に見ると、natural 条件は imagine-target 条件にもっとも近い。

Experiment 2

実験 1 への二つの批判を解消するために、手続きを変更して実験 2 が実施された。

実験 1 の結果への批判と対応

- ・ 参加者の事後の意識的な再構成に頼っており、自己知識の活性化を直接測定したとはいえない
- ・ imagine-self 条件での自己関連思考の増加は、参加者が教示に従っていたことを示すにすぎない
- ・ 上記の説明では imagine-target における自己関連思考の増加を説明できないが、手続きに二つの変更（ターゲット、測定法の変更）を加えて実験 2 を実施し、自己知識の活性化を直接検討した。

実験 2 で用いられた指標

- ・ 実験 2 では、代名詞を選択して、未完成の文を完成させる課題が用いられ、選択された一人称代名詞の数が従属測度として測定された。
- ・ 一人称代名詞(I, we)の選択増加は自己関連の認知の活性化と関係している (e. g., Wegner & Giuliano, 1980, 1983; Agnew, Van Lange, Rusbult, & Langston, 1998...)
- ・ 視点取得が自己関連思考を増加させているのであれば、一人称代名詞の使用が増加するだろう。

方法

Participants and Procedure

- ・ 大学生 142 名(男 39 女 103)が授業の追加点と引き換えに実験に参加した。条件間の男女比は均一。
- ・ 参加者はペアで実験に参加した。4 名の実験者 (男 3 女 1) のうち 1 名が実験を担当し、“第一印象についての実験”であると説明を行った。
- ・ 研究中にどうしても“空白の時間”が生じてしまうので、その間に別の言語関連の研究にも参加してほしいと教示して、映像を見た直後に従属測度に回答させた。
- ・ 参加者は別々の部屋で映像を見た。椅子の上に映像の見方についての教示が置かれていた。
 - 映像は女子大生 (俳優) Lisa が自分の大学生生活を語るもの。内容は平均的でニュートラル

Materials

- ・ 従属測度は Linguistic Implication Form (LIF; Wegner & Giuliano, 1983) が用いられた。LIF は 20 の未完成の文のそれぞれに、与えられた選択肢から選んで主語をつけるという課題
 - I (一人称単数), we (一人称複数), them (三人称複数) + he/she (三人称単数, 追加)
 - 従属測度は選択された I, we の数。

結果

- ・ 選択された一人称代名詞の数に対し、性別×教示の ANOVA を実施したが、教示の主効果も含め、有意な主効果、交互作用は見られなかった ($F_s<1.6$)。

- ・ しかし、事前の計画どおり計画比較を行うと、有意な結果が見られた。
 - 視点取得条件 (self: $M=13.85$, target: $M=14.17$) は抑制条件 ($M=12.68$) よりも選択された一人称代名詞が多かった
 - imagine-self 条件と imagine-target 条件の間に有意差は見られなかった ($t < 1$)
- ・ natural 条件で使用された一人称代名詞 ($M=14.28$) は抑制条件よりも多かった ($t(137)=2.33$, $p < .05$) が、二つの視点取得条件との差はなかった ($ts < 1$)。

GENERAL DISCUSSION

結果のまとめ

- ・ 視点取得教示は視点取得抑制教示よりも、自己関連思考と強く関連していた。
- ・ imagine-self 教示は imagine-target 教示よりも強い自己関連思考、弱いターゲット関連思考をひきだした
- ・ natural 条件は imagine-target 条件に近い結果だった

Perspective taking and the activation of self-knowledge

視点取得が自己関連思考を増加させることは何を示唆するか

- ・ 本研究は、視点取得によって生じていた自己と他者の merging の強まり (e. g., Davis, 1996; Galinsky & Moskowitz, 2000) の原因の少なくとも一部は、自己関連の情報のアクセシビリティの高まりであることを直接示した
- ・ 視点取得が思考や行動に及ぼす影響 (例えば行為者-観察者バイアスの逆転) を自己関連思考が媒介している可能性を示唆
- ・ 愛他的な援助行動に関する議論にも寄与
 - 視点取得が自己関連思考を強めるという結果は、愛他的援助行動の原因は自己配慮であることを主張する Cialdini の立場を支持
 - 一方、imagine-target 条件が imagine-self 条件よりも自己関連思考が弱いという結果は、愛他的援助行動は“真の”愛他的動機からくると主張する Batson の立場を支持。(愛他的援助行動派 imagine-target 条件のほうが imagine-self 条件よりも多いため)

Is empathizing natural?

- ・ 伝統的に使用されてきた watch-target 条件は、視点取得がある場合とない場合を比較するためには有用だったが、それは必ずしも日常生活で私たちが行っている自然な反応とはいえないことが本研究で明らかになった。
- ・ これは今まで見られていた視点取得あり/なしの結果が、視点取得があることではなく、視点取得が抑制されることによって出てきていた可能性を示唆する
 - 抑制教示によって生じたターゲットと観察者の心理的別離は、自然な共感過程を妨げる
- ・ もちろんここでの“自然な反応”は実験室の中で見られた artificial な側面があって相対的であることは否定できない。しかし、本研究の結果は、他者を見る際のデフォルトの反応は、その人の視点をとるという外からの教示と似たものであることを示唆している